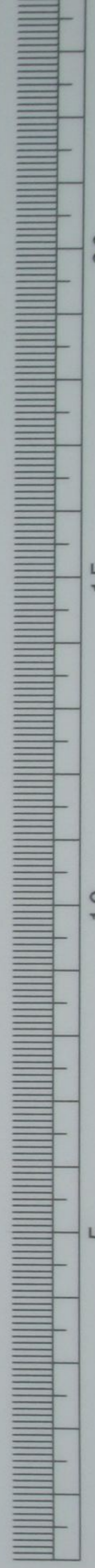


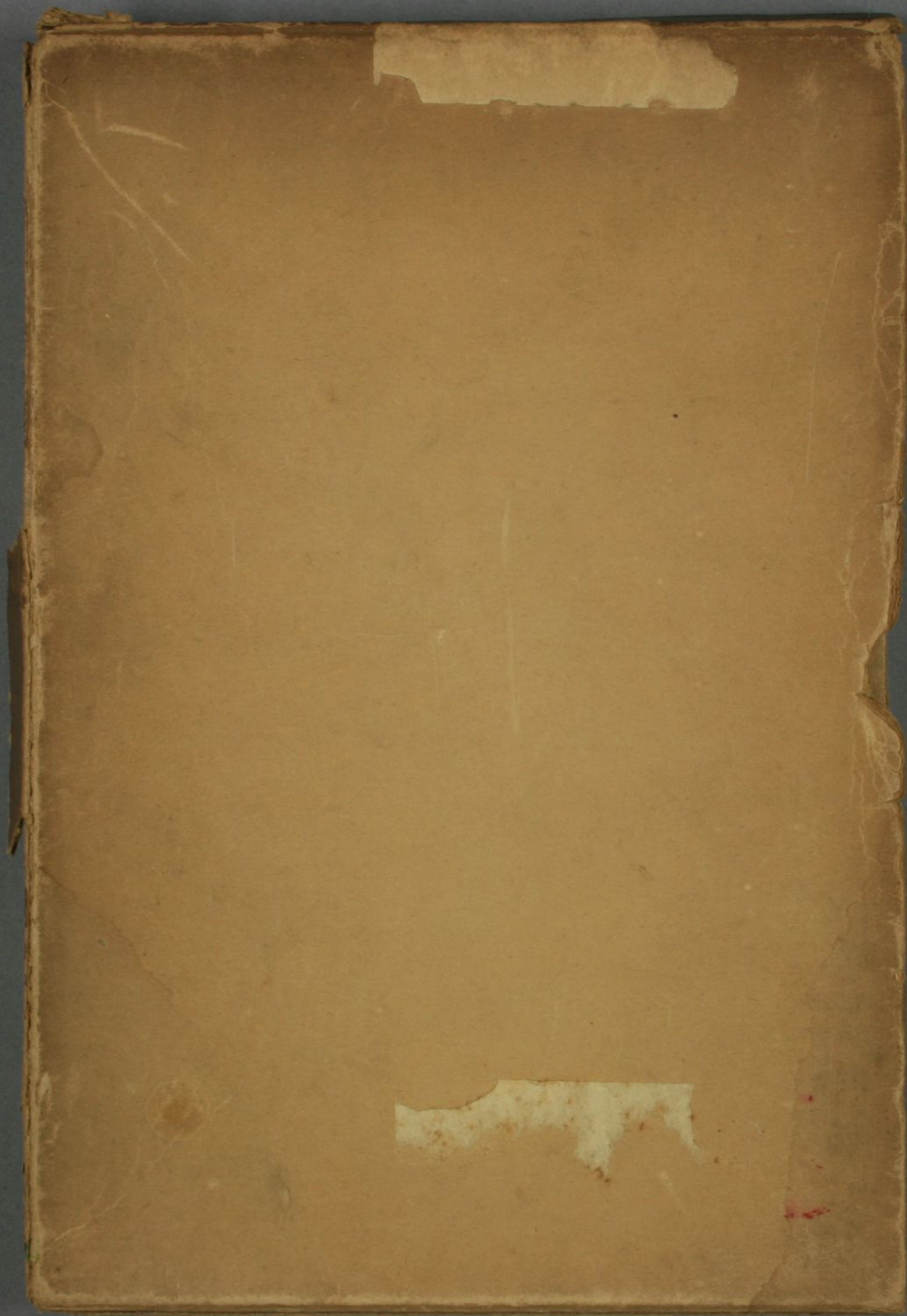
句千一樓碧一





一  
碧  
樓  
一  
下

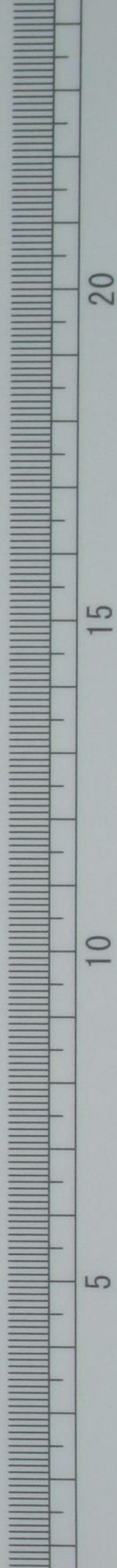








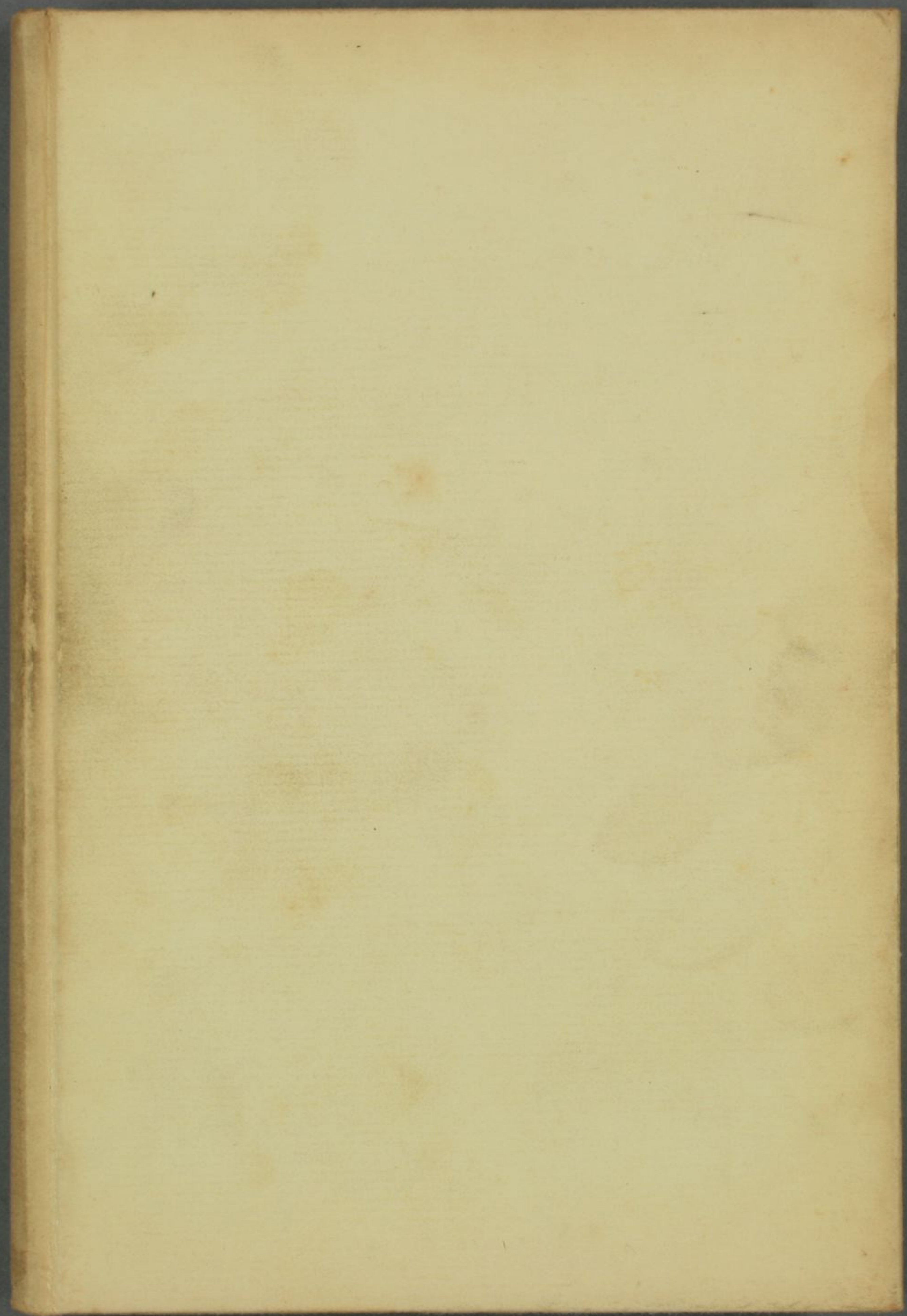
1507  
1000





一碧樓一千句







響也へ

一ひさきふて

一ひさき

共まにせま一ひさきまを録ます

古

浪

の

水

味

子息まなく



一碧樓一千句



この秋、第五十年の誕生を迎へて。

街中の人ごみへ出て行つても、さう思ふ。

自室の机の前に坐り込んでも、やつぱり、さう思ふ。

儂は選手、長距離自由型の水の選手だ。

この句集は、或るメートルに於ける僕のラップタイムである。

これはあまり芳しくもないタイムであつても、これからさき、ぐんぐん泳いで行く餘力は尙充分に持合せてゐる。

僕はがんばる、一寸ちに力泳するのである。

水の中を眞裸で泳ぎぬくのである。

僕の全身から油汗がじつと滲んで来るまで、水の中を泳ぐ。

儂は選手、長距離自由型の水の選手。

昭和十一年秋

一 碧 樓 生



は  
か  
ぐ  
ら

大正二年までの作

杜	芝	多	朝	第	は	目
		摩		二	か	次
				句	ぐ	
	生	川		集	ら	
……	……	……	……	……	……	
一九七	一七三	一五一	一二九	二五	五	



この本は私のためには懐かしく、また痛ましい墓簀です。

『日本俳句』に没頭して居たお坊ちやんの時代、『自選俳句』で個性尊重、老大家咀咒を絶叫して、他人様から謀反人よと罵られた時代、『試作』を起して建設に苦勞した時代、この期間の句から氣儘に選み出した數十句です。句集を編まうと選み出した最初の句は七百句近くもありましたが、いくら削除しても氣に喰はない、實際この頃の句の多くは『本當の私』ではなかつたのです。私の個性、私の行き方、つまり私の歩いて來た道筋を明かに表はしたいのが本望でこの句集を編んだのです。また一方には、日本俳句などに載つてゐる私の句を見ると自分ながら『本當の私』の句と思へぬのが多いのです、道理、選者といふ節を通して居るのですから。で、どうしても私自身から見ただけ『本當の私』の句を集めればならぬと思つたのです。

この句集以後の作物即ち試作の後半期から現今の第一作の句は近く私の第二句集として發刊します。

大正二年四月

一 碧樓

中 塚 直 三

錆小刀いぢる窓梨花の晝悲し

春の宵やわびしきものに人體圖

菓子屑に似て女工等や春日照る

烏賊に觸るゝ指先や春行くこゝろ

蒲團いちりかくて果つ女や晝霞



乳親の嫁ぐとも聞く春の雨

灰の中に生きこる虫や春日影

自像見入る時淋しみや宵の春

墓地買うて猶葬らず耕しぬ

落爪を餘所に我畑を打ちにけり

晝霞親死んで渡舟筋替へし

男着に縫ひ替へ衣や鳴く蛙

逃げ來しが歸りたさ浮きし柳かな

柳などあるらんか夜を着きし宿

梅も散りぬ煙草好きにて淫ら者



事の咎めなかりしに縁の遅日かな

漕ぎ負けし舸夫の大唄霞かな

爐の名残竈漏るゝ焰見て居たり

河原畑すかゝゝ打てば日落つる

街行くに誤診の耻や飛ぶ燕

嬌聲に關せず生くや飛ぶ燕

すかゝと田に入りて蛙釣る兒等よ

梅に荏苒など云ひ越しつ娶りしよ

窓の藤煌くや殊に妻居ぬ日

大雨の日藤茶屋に寄りて飲む水や



兒の死顔端正と見つ藤の花

離縁話かるくくと運ぶ麥青し

不逢戀

鳴る如く蛙鳴く夜の直き道

京都の友に

柳緑せり飽食に居る君か

西日暑し芭蕉はあれど黄花草

風吹いてこの夜暑さの色狂ひ

葉柳のこの夕や兒と疎み居る

午後に悲し醫費へ道の青芒

暑き朝の鋸音や縁家に泊り

合歡茶屋の亭主甘い丸藥呉れて



信仰の鎖鳴る鮮に痛ましき

明易き腕かひなふと潮匂ある

八百庄は酔ひ死にし葉柳垂れて

炊事部へも興りつ住めり青芒

相許せどなほ文もせず居る涼し

額廣うなりゆかん思ひ夏籠りぬ

蚊遣時浅沼に鳴く魚のあり

耳少し疼く日の團扇の白や

驚きの過ぎしに汲むや家清水

遺書抱へ来てこの旅の清水かな



縁家あれど宿とりし螢夕べかな

よべの痴態偲ぶ窓花蓮眩し

歸省して葬ひに三度來し清水

雨の蝙蝠ひた狎れ初めし友垣や

背戸若葉厨夫の戀に晝風げり

忌の事に柿のあるじが一喝よ

我死ぬ家柿の木ありて花野見ゆ

柚が羽織着し日の心鳥渡る

兒の心ひたぶるに鶏頭を怖づ

行李解かて三夜さ足りけり虫そゞろ



霧晴れの銀杏や時の黙示とも

秋風のあるじ家憲に囚はれて

秋風や眼に巨魚浮ぶ漁休み

畑に見る蜻蛉の中の我家かな

秋風や發病の日に似て風げる

秋風の沼魚に馴れて匂ひなき

赤子見て出づ門や赫つと秋晴れて

一屬吏となり了せ手帳秋晴るゝ

虫更けて掃くことも喪に居りてかな

芙蓉照るや魚を焼くしごき帯の日の



行李空しきを芙蓉の宿に置き捨てん

母亡けれ悲しみに焼く柚味噲かな

惰け日の河船頭よ鶏頭花

誰のことを濫らに生くと柿主が

死期明らかなり山茶花の咲き誇る

鍵の錆手につく佗びし晝千鳥

富街ふ言灯に出でつ鳴く千鳥

入嫁の前

やがて寒う見ん装ひのきらびやか

奇蹟信ぜずも教徒なる寒さかな

浦に育ちて池を恐るゝ道の霜



千鳥鳴く夜かな凍てし女の手

逃げて減りし鳩ともなくて返り花

敬遠の一書や霜華鳴る思ひ

煤一と日惰け遊ぶに照る池や

多かるを忘る船傳手返り花

箕焼けしばかり他事なし返り花

灰を拂ふ心に去る地なく千鳥

我胸出郷口占に千鳥羽ばたく我足に

故郷の水の味晝千鳥なく



一 碧樓第二句集

はかぐら以後大正九年迄の作



かう自分の句を集めて見ると、句集は戀人のやうにやさしく、自分のことものやうに可愛い、また自分自身の中からであるやうな氣がする。

私の第一句集『はかぐら』以後約九年間の作句から氣儘に選み出したが、句数は存外に少ない。それに大正元年頃の私の句境に比べて、今の私の句境がどれほど進んで来たか、自分にははつきりと判らないほごです。この九年の間はかなり努めて来たつもりであつたが、この長い月日に何をして居たのか、どう一生懸命になつてゐたのか、なさげなく、羞しい事です。ただ最近になつて少しく氣の昂つて居るとは私としては何よりもの喜びであります。

歩みはこの様に遅々としてゐますが私の踏みつゝある道は正しい、そしてまことの路であるに相違ない。私はこの正しい淋しい道をまじめに進んで行く一兵卒である事を甚だ光榮に感ずるのであります。

私の行かうとする路は尙遠い、けれども私は私一ぱいの勇氣を以て進みつゝあるのであります。自分は日一日と大きくなり、日一日と力を増して來るに相違ない。自分の第三句集は素敵に振つたものになるに相違ない。

大正九年十月吉日

一

碧

樓

うすもの著てそなたの他人らしいこと

紫ばかり朝顔が咲く工場住ひよ

まじめな夫人萩に椅子出して

掌がすべる白い火鉢よふるさとよ

酒知らぬ男に冬日黄いな森



霽れるそのうなぎへメスを刺させい

少年は鶏卵を敷へてしまつて冬の蜂

乳母は桶の海鼠を見てまた歩いた

産婆うとうと火鉢に寄り二階明るい

浅草、二句

道から闇が流れ入り蜜柑酸つばい

コートの裏ちらと緑なるひる鍋

親鳥まどろみ春の潮鳴りたうたうたう

海苔を焙つてる俺の脊の廣かるおもひ

海月取りいらいらと我家見る夜かな

蘭買の親切に姐さんしんと坐りけり



稽花火欲しう工女に雨ふりぬ

己が掌接吻ひつゝ青年は接吻ひつゝ草紅葉

團栗は無意識に轉び惡事は根強く進捗す秋日かな

小牛は何もなき冬田を眺めハタと走り止みたる

鮑屑の出る有様こそ面白し棟梁はこの朝識りぬ

日高まさりつゝ我家包まんとす枯野

石切り夜の心に移らんとす蜜柑かな

額廣い小母さんに氷柱光りつくるなし

君が手套は青くながぐとつきぬ扉

灰つくることにわが焚く藁火かな



夜更くるほどに見し炭の木目かな

女愚なれば茸山の道の乾き

牡蠣賣の西日に噎せて詮なしや

女ごゝろに藪道が赤う笑れる

空廣うみぞれ來し牡蠣を打つ

口ごもる葱畑の廣き中

顔小さき女なる寒の街なれ

煤を掃く床下の廣さのまひる

くろちりめんひんやりすあかがねひばち

日照りつゝ鴨打に港小さけれ



障子が照る葱畑に歸り著きたれ

我家のまへの夕まぐれ蝨つかみたり

葉鶏頭に洗ふ鯨申に今日足らじ

瓜もぐに荒浪の鳴り暮るゝはや

葵立つや盆月に入りし夕風

晝顔に暴風となりし門鎖す

石だゝみ踏み立つて木蓮赤し

柘榴一本の背戸春の雪積もりたり

枯野樹ありて馬のやさしき

お前のことに汽車にのる湯豆腐うまし



冬帽たゞしくかむりたる男さみしければ去れ

冬帽著し人すんぐ過ぎゆくわれすぎゆく

川大きく流れ宿屋のむすめ肩掛す

平凡な火鉢買ひたくてあるく晝

部屋に持ち入りし野菊花うら

墓にまゐりゆく笹草にぎはへり

はらく霧のなかあうらてのひら

梨嚙ちり捨つ窓そとの廣さ限りなし

蕎麥畑白きばかり踊りすゝまぬ

鯨繩四五鉢女房を持ち



盆の人々の裸なる葉屋根厚し  
 胡麻花咲きし盆の休み日の袖よ  
 樹の中の柳散る朝の家音よ  
 足もとの地の白き魂送る  
 家の間のひやづく夏娶りたり

人夫がしらよ樹のもとの晝顔咲ける  
 からだいたはる蓮苔みたり  
 蛇ころしたる空の青さの和み  
 鯨引らもどる廣道ふめり  
 游泳衣著し水に聲出づ



苺畑の日に墜せつ娶りたり

百日紅花咲き地のものゝ巖

男ばかりあるく葉柳の道のゆがみ

漁夫らいらく地を踏める夕べあたゝか

あさひばりなきひびく河床赤し

浅草の朝長し角店春日

網やぶれ讃岐の山の雪残り

暖き夕の別れの俣の揺るゝ

ひたぶるに機械場を出たき梅咲きぬ

老人よ小鳥よ東風吹く赤し



東風地を吹き馬は繫がれてゐる

木瓜つぼみにぎはへり家を風吹く

黒い外套を着て君が泣き入つて辛夷の花

河水が流るゝ襟巻とれり

霜が地に下りる堅氣であるまいやつ

坂町ででくはしてしまつて黒い襟巻をしとる

冬の日のお前が泣くそのやうに低い窓

冬の夜の我が持ちて人形の眼の動く

海鼠突の兄弟が家に戻つて来てしまふた

海鼠を探らんはるゝ陽があがる



酔牡蠣のほのかなるひかりよ父よ

心躍る霜夜の登の雑な

理髮師霜夜の人體圖よろこべり

處女なれつかくと霜を踏み去る

埋火の一夜の名残の我れ

闇から來る人來る人この火鉢にて煙草をすひけり

酒を飲みわが綿入のたもと

赤土匂ひ夕ぐれとなれば女あるきたく

茸飯などを食ひおそろし日過ぐ

兩手さし伸べうす黒い炭を搦んだ



母よ葉の多き秋草の一束ね

霧の夜の船造りの大工布團に入り

あけぼのゝ横雲の冷ゆるものを去なし

酔へば秋の夜の板の間のおもしろく

己れ首太き秋夜の行く人と連るゝ

秋の晝赤子口を突出して何ぞ

牛を屠る朝々の庭の露見たり

葡萄を食ひ暗い一室を出でられず

桔梗咲けば牛のからだに觸るゝ

むすめ白痴の秋拾肌へに著けり



露冷えのよろこび口籠りたり

漁夫の稼ぎのおもしろくなく草の花咲けり

やまと楊子は身に添ふものゝつまらないものゝ冷やづく

花火あがる夜のよろこばしくへさきのほそし

秋風家吹けば百人の女もの食へり

夜をたのしみの船大工若く秋風吹けり

母よ巖を打つ浪のしぶきの秋

蝻を焼き笑ひ合へるこの家

こどもをひき据ゑまろき梨をとらす

稻むらへ追ひつめる者の黒髪



秋の崖急なれば男女むつみけり

子を産みこのかたの澁柿の木が二三本

泡盛に酔へばいちにんの肩先を突き

日覆を掛け小さい魚一つ一つを殺す

十八才の工夫工事中感電して死ぬ、三句

若い者が死んだ涼しい日の日覆垂れ

からだ逞しき死骸單衣蔽はれ

新らな葎簀眞急に立て掛けられ

葉櫻秋となり借家人嚇さるゝ

雑草の花咲き人の醜き

罈かけの一繩沈め果てたり



涼しき晝の腹減りしまゝ家出づる

夏夕べ娘たちの行くうしろの廣さ

人蒼ざめ一八の根を掘れり

逢はむ夜の茂草踏みあまりたり

日けぶる我だちが巖かげの夏

夏足袋はきてよそくしおのれが聲

辨天祭の單もの著せかけらるゝ

ある日はひとりで體操をして蠅が淋しい

水を貰ひにゆく夜に入りてからだ暖き

父よいづこもかげろひてあり桐の青葉も



葭切目の前に鳴きさびしまるゝや

毛虫落ちる今日も土を踏みものを食ふ

春潮すんぐ引いてゆく我が家に居らむ

酔つばらつては春夜の佛の花をつかみ

燕鳴く日の中からだ冷え来るや

胡葱一束ね萎びたる手にとらず

春の夜のつめたい腕垂れたり

魚じまある朝の庭木眺めやりたり

疾風の春の樹の下の人

誰でもいゝ君の汐干連れの一人の俺か



雀子の育ちゆくひくい煙突

松露のすひものその夜の人らなぐさまず

胡葱一うねにつくり年とる女

水ぬるむ不漁の手濡らさずをる

黒い風呂敷に何もかも包み梅林

あいまい宿屋の千枚漬とそのほか

蕪の葉をつかみ風こゝろよき

女の兒眞白いマント著て近より來る

善い坊さんが來て冬の海蒼き

雪ふる夜の障子多けれ逝くや



貧しきものの高つきの羽子なる外れず

手毬かゞる麻の葉のほかはなき母よ

飽かず暮らすなか／＼炭とりぞ

短日の黒いさかなの中にも穴子

帆布の匂ふ父と子との短日

赤い落葉の一日の背をまるめて人よ

港一ぱい舟の戻る冬の赤い襟した

水鳥しろく丘裾を急ぎ廻つた

かの夜の埋火も彼の女も闇

埋火かきたたてゝ赤い慰めのなし



一日の疲れの足袋を脱ぎ揃へた揃ふ

葱畑のたのしき酒に酔うて眠らん

曼珠沙華つき挿す水の少なし

弟息子は茫白い野で芒ばかり見た

私が見堪へる芒の根の濕りです

上人の御襟巻の軽い捧げたし

逐はれ越ゆる夕月の山の草の實

曼珠沙華咲くへ來た男の顔のまるみ

我れ逃げず沙地の二三本曼珠沙華

河上の兒らが曼珠沙華立ち腐れしぞ



月夜の山々のけだものよ毛を持ちし

柿を願つやさしうて舟板の白らけ

梨を食うてゐるやさしい悪者でした

わが風邪気味の夜の美しき電車轢くものゝなし

秋の山が根のこの水を涉りて父子

粟畑の道のくねりよ忘れず來たり

身のありがたき石垣の草のうす紅葉する

曇天の秋の人々よ錢持ちし

風邪気味のこの夜のちいさき鮎のひかり

風邪心地の眞晝の垂穂の稻の水のべ



子を背負ふた者の咽喉見せて稻が色づいた

棗を食ひこぼし事もなう手を切らうとするも

茹栗うまいうまい流産した顔を見せとる

家々の人の聲す粟の穂が垂れた

我が手甲のかたい一日の薄紅葉見た

冬来る髪に油して人を苦しめ

柘榴酸つばい私の前の牛が動く

露の朝の牛の頭を見い老爺も見い

秋の鳥の聲を偶々に聞いては菜切庖丁錆びる

つきしろの舟子舟板の匂ひ



粟畑の雨の日いたづらなる山の根

となりの男牛となりの青柿の澁柿

黒塀よ低き秋の日の善人來る

小窓よ秋の日のわが両手汚れた

糸取女背を見せてばかり日没

荷馬車が唐辛子畑へ突入る事もなく馬の口とつた

萩が咲きそめる川向ふできつい労働だ

秋日の汽車へ乗込む若い地主さんよづんぐ

おかみさんカンナの花が何ともなく家へはいつた

これほどの事を嬉しがる麻服著とる



一人の若い醫師の何とはなく汗ばみ苦しめり

夫人よ炎天の坂下でどきまぎしてよろしい

網シャツを着て死んだ鱧ばかり見た

かくし男が眠るであらう盆の高潮があげてくる

一冊の日本歴史よ樹の下の眞夏よ

眞夏の鏡の前の何ぞ我れ戯るゝ

夜涼のてのひらの乾きて夫婦

蚊遣の草のしめりを知りたりしふたり

商人若々しく雑草がかたまり咲いた

家の空の三つ星が三つのさまのうれしく



白らけ風いだこの海から鱧を釣つて毎日

青い桐の木の下でじつとして惱んでゐる

簇を折るしたしみ眞向きに坐る

漁夫ら裸が苦しい夕ぐれの何かと話す

裸苦しき桐の葉の破れ二三枚ならず

或夜の賽がはつきりして夏夜の男女なり

夫婦は赤子があつてぼんやりと暮らす瓜を作つた

牛の角がぐつと曲つてゐて麥が熟れ過ぎた

麥が熟れ過ぎた一枚の畑を忘れず死ぬる

夏の林のうちに斬りつけん何物もなし



早朝うすものを著たこの者に逆らひ

この朝うすものを著て佛壇の前にひさしき

河原ひろく愚物が汗を垂らした

うすもの哀しき身のほどのこの夜が明けた

単衣を著たしんじつ舸夫が水を恐れ

秣の一車のかげでさゝやいて夏の日が来る

尊菜をすゝる我が肩をおとし亡ぶべし

雨ふりそゞ地よ看守汗ばみし

夏一夜二夜この者しゝむらの冷ゆる

好かれて筍茹る間を待たされまして



大海夏となる首細き者ら首太き者ら

篠懸の葉が茂つて人々が蒼ざめて躍つて

螢がころ／＼死ぬる晝で古いお前が帯をしめて

この池が潰れる夏のはやり唄のいくさりも知つてゐる

もの食ふ何ぞたゞによろこばし我夏に入る

君来るよろこびの蠅叩の柄短い

胴長の犬がさみしき菜の花が咲けり

若者からだ痛き日ぐれの蕨食ひけり

日ぐれの鱒網の烈しき身を躍らせて網子

夜の冷ゆる寄居虫も沙も



汐干のことの憤り飯を食ひけり

種まきおくれたるやさしく蒔かん

花見の出かけの赤い面を持ち捧げたり

花見の鼻高面をかぶりをかき坂を上りて

息子の無理が通る桑の木の子が立つた

菜種が咲きかけた夜明方の貧民

春一夜明くる捕へし者のてのひら

惚れた桑買さん黒いお膳についた

桑買さんに惚れる溪の音あらあら

針魚のあはれことごとく並び揃ひたり



針魚の口の尖りを笑はむとしたり

春一番が吹くこども家の内に吹かれたり

桃一枝を活けてこのよるの布團薄うし

女労働者枯草の匂ひ幾群となる

洗禮式のすべての窓をあけ窓の木瓜赤し

まじめに犬のからだを見てうららかな

此木がきつと芽立つてあなたが私にひきずられる

深川めしを食ふ春日のわが肋覺ゆる

凍る日の一人の戯奴が煙草持ちたり

寒の雑穀倉でしたゝか言ひ責められる



寒鱈を食ひあらくしく言へどこの叔父

硝子戸よ烈寒のものを食ひ散らし

師走の一つの島の沙濱

鰻を洗ふ水の桶を胸もと

赤子が死んだこの家の飯と湯豆腐

霜夜の物音きこゆ手を伸べる

水べにはげしき働きの足袋穿けり

煮やつこを食ふお前のうしろずつとあいとる

あんこ鍋のいちにんを捕へたり

正月吉日の菓子をいたゞきて打伏せる



申柿ちぎり食ひぞんざいに言ひます

船長船を離れてゐて派手な首巻しとる

松納めともなれば前の山々

わが首巻のわが匂ひの雨の夜

柿の核を見るまことなるひとときや

家々ぎつしりつまつて少女は手套の快く

わが道の冬の丘のなだれ睜めねばならない

娘たちが初冬の會堂の古び

庭の枯草のほのかなる赤みを見せて我が家

君に追ひすがる道の枯草の匂ひ



夫婦が日日の磯の巖の師走

わが行く冬の野の小鳥よ翔ちて小鳥よ

林檎を嚙ぢり肉體を恣にあらはす

わが短日の林檎置き輝きて

娘は短日のいぶせき家々を見て過ぎんとした

初冬低い塀のうちに働け

夫人はこどもを持たないで冬の街の賑はひを見た

雨夜の柿を手にす笑ひたり

死 鯊も藻の屑もぬくみ

豪雨となりし鯊繩を沈め



冬めく夜の何事もなき夜の菊の花

蝨取りが僅かの蝨をとり山々の連なり

鍛冶屋が藪の秋誰とても往來した

鍛冶屋は火花を散らし秋の夜の家に住みたり

鍛冶屋が午休みの青空から何も降らない

秋の鳥に鳴かれる家の井戸を覗いた

大根畑を戻る顔を濡らす雨の明るさ

雨夜の巻たばこのうまさ女は乳を包んで

鯊釣の歸りの鯊が少なうて洲崎へ灯が入つた

酔うては蕎麥刈に手を出したくて来る



鯨一連を一籠とす籠

紫苑の一つのテーブルへ来ては去ぬるはや

畑の土が夜となる牡牛青柿

わが霧にぬるゝおもてをあげる

霧の夜の白首とばかり思へないで地を踏む

月夜のうすい著物をきて家を離れずにある

私が大函の妙のさじのない

犬が犬の匂ひの露けき

星空となる一つの四つ手の獲もの

煤降る中明方の彼等が四つ手



月夜のわがそびら君方に見らるゝ

秋の日の日中の野の石のぬくみ

藁屋根が腐る柘榴を食つて居る

黒鯊迷がした水中何もなし

残暑の家の人々の寛なり

残暑の野を廣う見渡し工夫は歸れなかつた

巖が根の深し粟實りて垂るゝ

送り火よ燃え盛り地上に明る

墓参の道の月となりし手あつし

墓参戻りしうすものゝ姿見らるゝぞ



粟の穂垂れ老人かうべ垂るゝ

紅蓮家をめぐり咲き男女なり

盆提灯を繕ふわが膝に抱く

盆提灯二つ吊らんとする三つ吊らんとするをろかさ

栗の花地に落ちみだれ光りなし

牧夫が肥えるあはれ栗の花の匂ひ

梅雨入りの降りの鶏の首ほそくし

空の白菜ゆるる少女が袂

白菜ゆるる海のかくれ巖のかくれた

森から風の吹く桑の實食ふか



梅雨の寒き夜の笑ひひびきてや

梅雨の朝の竈の火焚く者のしばし

形見の帷子取り出される疊へおかず

此夏我家を出たくない何の心なる焼茄子

麥の刈跡の廣々し白飯食むか

さばかり麥仕舞の馬をいたはる者や

麥扱きの満月となりし家そと

音なく立ちし桐の木のみらさきの花

我らの桐の木二本の離れて咲いたむらさき

麥畑の實入りを見て立去る者どもの徑



單衣著の母とあらむ朝の窓なり

麥秋の河のうねりうねり入る海や

淺草の夜の酒をのみ水をのみて夏めく

行く春の朝日さす飲む水

薔薇の花を見る私の蝕める葉を見る

夏めく家そとに流れ逝く水

山風の吹く落畑を出でゝ吹かるゝや

母子が夜の大海の夏めき暗し

朝日夏めく空船の船頭も妻も

さし潮の我が舟の浮きし夏めき音す



柀網の柀形のをろかしく春の大雨

人群るゝ中苗木の一束をほどきあたまあがらず

春の夜更の一室に水をのみてこぼさず

春晝わが職長の髪垂れさがりて額

朧夜君とあれば小石拾ひあげたりし

夜の菜の花の匂ひ立つ君を歸さじ

春の日のくれの横浪をうける今ぞ歸らむ

一島の麥の穂立ちの巖々のたゝすまひ

日毎の家裏の茶種畑の明り嫂

辛夷が下の枯笹ぞ土の粘りぞ



春の廣野の風吹き立てば我厨に戻る

風吹いて蛙をつかむ者らである

老が笑ふ春の磯畑の石の白く

雛の日の軒垂れて我家の雛あらず

雀が巢を立つてしまふ屋根の空なり

巢立子飛び去る我らが井の浅し

すみれをとらむ道の直きおどろき

牛の大きく牛小屋の春の山のべ

針魚繩一流しの引汐の巖出づ

雀の裸子がとられる眞急なる梯子



燕がなく夜のとかうかうべを垂るゝ

櫻の幹太く牛の角のまがり

蟹をとる二人が冬の入海のさゞなみ

一人は首巻を巻いて死蟹を手にす

冬の晝寝をする舸夫が死蟹の一箆

海鼠の一桶を抱へ歸らんとす渚の波

梅が咲く海鼠の桶の水の多少

二本の梅が咲く家の貯への藁嵩

ペラ／＼の首巻我が巻けば風邪で死なない

ふるさとの餅のまるきよ風邪氣味の夜の幾度手にす



埠頭を没す潮の芥の春を戻つた

小娘なれ手套を袂にす

我らが舟の寒風を歸りつきしぞ戸口

家を出でゝは早春の海への男女に接す

正月のマントの襟を立て憎まれてあれよ

懷爐を買はんにもこの森道を來た

彼の女は俤にて去る鳩は浮いて流れる

早春殊に山ふもとのわれらがやしろ

工女ら休む日とてなく早春の山の邊の濕つた

埋火一夜の河音の荒立ち明けんとす



春の夕靄立つ二つの橋を二つ渡つた

なま／＼鶏頭が地を離れようとしてゐる

裸で飯を食うて淋しいか足を組みなさい

裸で三味をきいてゐる善良だ

蝨とりやめないで雨水が首を流れる

桔梗が咲く彼等がトロロの碎けよ

柿青々主人が云ふまゝに家族ら

母をおろそかにして梨の汁を垂らし食つてゐる

處女がせまい／＼芒の道のよろこび

蜻蛉の羽をもぐ快さ大地がしんとしてくる



霧の夜家に歸りゆかむ足のもつれ

芙蓉が咲いた私らの飲水を飲む

女が欺されて秋夜の黒髪を匂はせてゐる

光りつくるない霧の夜の一つのコップさへ

草露流れる朝のいくぢなしが歩き急いだ

たなばたの夜の地上の暗さ人動きたり

蘆屋・三句

暴風の松原の木肌の温みつゝ

夜の地曳の者らが焚火の燃えつくすさまなり

泳ぎ連るゝとなく泳ぎ出づ海の青しぞ

ふるさと、二句

青田の中白雲のひゞき地に入る



青き海へ磔す弟と小石あらむ限り

うすものの姿の姪を見む茂りの道

姪を失ひて、八句

茂りのなか一筋の日ざしはひゞきたり

姪がつくりし草花の咲く中にも向日葵

草花が盛りの眞夏死に果てし死にしか

死にしか姪の夏衣の疊まれし重ねし

輿の飾り花の朝顔の蒼のなきはなやかさ

夏屏風のかげ兄夫婦は坐りたり

喪にあれば道々の涼しき草の長い葉

繭買も繭籠の大きいさも影を作す



萍涼しく家は動かじ

夏の日の小さい門を入りうしろを見ない

朝からの麥仕事のやさしき歩み

わが顔面の痛き夜の葉柳の家の女と

匂ひなき一鉢の草花よ壁よ匂ひなき

裸にて一々の樹の葉見える

螢籠が空な百姓のよるひる

祭前の河原の廣さ往き來す夕も

蠶室の一夜の戀慕の身なり

桑匂ふ夜の烈しく手握りたり



夏足袋をはき捕へられたり

彼女が夏の夜を開かざる一つのオペラバッグ

地からの雑草の茂り女は知れり

夏朝貧民の兒が引抱へたる一つのキャベツ

小供が一人一人見る茨が咲いて白い

日かげりやさしく萍の動き

絲取女が戀の細紐をしめて木々の夜

絲取女が戀のおのがめれんすの帯の手ざはり

うすものたゝむさまながら沓にしてをなご

そぞろ汗引くわがからだよ母とゐる



浴衣のしめる夜の慈しみを受けよ

髪飾りとてなき笑ひつゝ枇杷を食つてる

わが懺らず垂れこめた青簾

一八が咲いた風吹き去る空よ

身の冷え顫ふ蓐ふくまんか

蘭買遠くも來し河の流れ

雲雀なく朝の纜を解かんとすつゝしみ

一つの蛙死に乾きて地上

桐の花咲きし森かげを出でじとす

桐の花咲き工場頼もしからず工場主



桐の花晝のけだものゝ尾太い

母ともの足りなく日傘軽くて少女

お寺の屋根のつまらなさ日傘さして来た

河原の茨咲き満ちて肥満な彼女と逢はむ

辛夷が下の井戸の水流すばかり

去なす虎杖の四五本を噛め

かげろひやますうすくかげろひて父の墓

木挽がいのち麦の青くて

鶏若く春の夜の家の闇

芹長ける朝晝のうす雲のひゞきありぬ



春の雨夜の人の寂しさの腕太し

いたどり嚙む心やゝに平かにして朝から

處女が朝曇りの地のうまこやし茂れ

人の醜さ草餅をくらへり

牛や牧者や生き汚れ残雪

母のもとへはや歸る摘草

老いしが見る山を焼く火の燃ゆる

春田のつちくれ一つ手にとらむ聲なし

旅人は旅をつゞけようとする残雪の山の大きさ

春曇り日のつらい工場の廣い



雪とけ果つる一本の木の根なり

彼岸ざくらを眺めわたすはかなさ

女が心燃ゆ春晝の牧柵の低い

春日の藪の巖にあそべる小供ら

菜種のつぼみもつ明るさ風吹くか

のらくら羽織を着て菜の花が咲きそめて息子

男女ら絶えざる争ひの青麥が伸びる

春草の青み醜女が失せず

空澄んで親父が死んだ裏藪の梅

夜の道の枯草のよろこばし枯れしなり



家が短日の子の顔の白さ

わが大爐の一夜一夜の山が根

枯草焚いたばかりで別れようとする

一月一日のわが焚火す胸のあたゝまり

いとちさき輪飾の何の飾りもあらぬかゞやき

霜夜逢へばいとしくて胸もとのさま

霜夜の厨夫がねる前のやさしさ

火燧ふとんの華やかさありて母老い給ふ

雨夜の一室の火燧の容ち崩さず

錢持たすなか／＼冬草の緑



爐べの一人一人去るを去らしめ

身ぞ愛しやまとこたつのぬるいあたゝかい一夜

水鳥見たはかない満足で歸ります

雪夜の女少し偽りを言ひて去にけり

師走の満月をあはれよろこべ漁師らが子ら

わが蓬頭を擲るなしか今日もこの葱畑をゆく

道の霜の水づく何處までも送りたい

身いとしき雪の日のしごき帯をひきしめ

鴨 打 を 憎 み 歩 み

舟をさつさと出す二三人鴨打め



朝

第二句集以後 大正十三年迄の作



いけない。いくら嚴選して抄出して見ても、やっぱり句がざつばくだ。  
 いけない。句が浮はつてゐる。  
 もつと自分の本音を吐きたいもんだ。もつと、性根を据ゑて。

一 碧樓第二句集發刊後、大正九年十月から大正十三年八月までの作より  
 選抄して此一集をつくる。

大正十三年初秋 於玉島

一 碧樓

無産階級の山茶花べたべた咲くに任す

爐話の嘘をゆるす赤い馬車も出て來い

正月の白浪の島の人ら來す

枯芝の丘の家から誰も出て來ない道

春の白雲が遠くて漁師の小供です



くがいの春の夜のはいせんの水

春の夜を眠る乳を包み

一禮すにんげんのあたま黒く音もしない

つんく葭の立つ道を行く少女ら

夏夜のこゝに小皿一枚も消え失せないであらう

萬燈が坂をのぼり來る坂の上

晨よ草よ地をかけめぐり祈り

地のたそがれのぬくみ石垣に寄らむとするも

夫とし妻としなゝくさ一日の霜柱

なゝくさの日はや星さまの西の空



自然と葱畑へ来てしまつた葱の中

雨夜の身をまかす小さい窓をあけてゐる

雲のぬくみ藪中の竹が葉落す

雨雲のひかりにすがり歸りたき工女

瓜を嚙ぢるさびしさにあるいてゐる

石や石屑や夜明けたる石屋のこどもです

野菊のうすいいろにわれらがからだまるばす

手の先の顔へ露朝の門をあける

徑歸らむとすわが顔に咲ける曼珠沙華

稽田にまろぶ子を持つてゐる



西風の小鳥が下りる徑の上に

こどもが顔見せた山がかる枯草の中

冬木につきあたる徑をゆく

冬夜の低い椅子にかけて下さい

いしだゝみへ冬木のひくい枝々

電柱と立つ篠懸の木の葉の残り

焚火を去る足音をたてゝ

夫が来る冬夕の軒下ふかく

さむい夜の階段をおりる母をうしろにして

ちりの橙をしぼりあふ宵のほどでした



鴨打の舟の戻りつきし渚の波

日くれぐれ女は眉をつくり部屋を出づる

磯の雪とけそめた浪打ち來る

春の田の二三まいうちつらなりし水

こどもたはむれあそぶ一脚の椅子の春の夜

幾人越す赤土山雨ふりしぶき

家を風吹く家の溝々つぶれ

冬木のもとに屯す人ら音をたてず

春の夜先生のうしろから一禮する

沖の岩小潮一日の雨ふりやまぬ



船の窓のまるい一夜さの人々と

けふ行かぬさどなみたつ沖のいけす舟

春の夜低い停車場にはいる人々とはいる

二人が背を見せて 葎畑にゐる

けふのさど波の水に踏み入りて貝拾

たかむしろ冷えくる二人話してゐる

鳥に鳴かるゝ朝の單衣きてゐる

日暮れの一脚の椅子を倒すひゞきもなく

雨の目のこどもとあそぶ太鼓を打ち太鼓ころばし

立つて田圃の遠くの灯を見てゐるこども



小母さんのうぜんかづら咲きましたのうぜんかづら

栗の木の花の残りし見える

震災一句

蠟燭のあかりにて見えるこどもの顔

家かげの赤い枯草に轉びたくてゐる

稲の秋の風吹き流れ二つ並びの山

歸りつきしも蕎麥の花かれの家のうしろ

傾きもなく沙に埋れようとしてゐるベンチ

となりあふ家々の霜の且

かがとのたかい靴でそつと来て下さい冬夕べ

やまなみなみうつ冬となる西山をかけて



すこしばかり落葉掃きよせる身をこゝめ

空薄うくもり雀が群れて來る巖

山々の明けの春河の流れ

家のうしろ夕かけてあらはるゝ干潟

冬夜のちさい手燭を乗り家のうちに

夜が明けた帆ばしらのもとにねてゐるこども

海を打つ一嵐し島々は遠く

夕風が鳴る飯を食ひお茶をのみたり

二つおきたるほのかなるひかりよるのすゑもの

すこしばかり雲をうつし山の尾の池



風吹き鳴る松毬をひろひとり

櫛の束を解く二束

干底ふりかけの雨おちそめた水の面

舟人の夕ぐれとなりし帆柱

桐の花咲きし吹きくる風

鴉巢をまうて沙におりこす

柴山湯の柴山

けふをかけて麥扱の二三日の家かげ

麻のしげりいのちををしみ

子鴉のなく雲の流るゝ

ねむはまださかぬ川のうねりうねり流れ



## 明王院下山

山を出で、ゆく日のひかりのぬくみ

家のみちの竹の實のりたるしらけ

雀はたちて地の暮れてくる

朝の潮満ちくる街の家並みのみだれ

草の匂ひ人の家々のかさなり

水のみこぼしのみこぼし家のかげに

日出で、道のべのけふの苗代

訪ひよりし雨のふりしぶき軒柱

門外の水田へ来る人々の朝な

夜のいとしきものに見せて日焼けの顔



多摩川

朝以後昭和三年迄の作

のうぜんかづらの花咲けば家の庭

秋風立つ山の松根をはり

門を出でしいまつきしろのそら

あはれ蟬のうまれ出でし木のもと

一つの星のほのかなるや星のつらなり



多摩川の、一河の流れ。

或時は水澄みてながれ、或時は水も潤れくくに、またの時は濁流渦を巻き、たうたう  
こして流るゝ。

春夏秋冬流れて、遂にやむこそをしらす。

まこと愛しくも、奇しき川のすがた。

水の流れてやまず。

一碧樓第三句集『朝』發刊後、大正十三年九月より昭和二年末までの作より選抄  
して此一集をつくる。

昭和三年春 於玉川寓居

一 碧 樓

蘆の花咲きし道ありてゆくに

來しよつかつか來しすだれのうち

山のうら見えてゆくみちのつゆけき

はうはう秋の風吹いて赤土山

秋の日門前の巖打ち伏し



山このごろ炭焼の煙立たぬ明け暮れ

木を伐るものひとり林に入り

鳩が出はいりするまるいあながみんならすぐらい

木のもとの落葉青き葉のまじり

枯芝を踏み來る弟なり

きりぎし大寒に入りし日のてり

霜夜ねむる母にして子にして

うすうす樹のかげすここも

人こゑす畑の土のうるほひ

家の軒みちに突き出でし寒明け



山の土ややまつつじ花咲きし

あさひばりが鳴いて立つてゐる木木

こゝ玉島の寓居は天満町さいへる  
くるわまちの中ほどにして

となり住むひとびとや夕べの星ひかり

鶏が飲んでゐる水壺の水ある

旅

ゆくゆく草を飛ぶ蠅をはらひ

老虎灘千勝館別墅

ゆすらうめをわがてのひらにうけ十ばかり

満洲にて

西の空の暮れ残り彼方

草を刈るいちにち山のなだれを

井戸ありて棲めば草長けし

朝の日さみしきは道にそへる家家



わたしたちに庭の草ぬれてゐる

木にゐる蟬見えてゆくみち

峰峰をけしきの秋風たち

鶏頭きるを見てをつてくれる

飛驒のかた大空秋となり

雲なく暮るる日の畑の菊の花

渚の浪も松の内舟人

ふぶきて山見えすゆくみち

火燧にゐる母にうちあけず一日二日

かなたへゆく人人雪をふみて



野のひかりて水のかれがれ

河原蓬が枯れて逢はぬいくにち

このあたり梅はまだ咲かぬ藪おもて

山ありてこの春の彼岸がくる

この朝の日のてりそめし竹の秋

ところの人のゆきかひ春の空くもり

住吉天王寺大阪の春の空

けふ涅槃いちにちの池の面

ひとりりて舟の帆をあぐるかな

北の山さくらの梢に見えて



祭見に來しとなく逢ひに來しかな

藤島神社に詣つ、まゐる人さて多からぬ  
さまなか／＼に嚴かにしてありがたし

松のみどり立ちて雲みな白し

二上山は北へなだれなだれゐて行く春

佐渡ヶ島夏めきし天つ日のひかり

一人か山の鳥に鳴かるるか行く人

よもすがら水鶏の鳴けば夜のあけし

暑き日のあれやこの浦の歸り舟

一夜さのなごり蚊遣の草も

木木のしげりて空より雨ふりかかり

壱飽島にて

土用浪のしらけこの浦につづく浦浦



東上口占

藪添もゆく野菊咲いてゐるこのみちをゆく

新居

冬を迎ふるこの家に松の木ありて

稲の秋の田水のさびし見つつゆかなむ

鶏よ草の枯れそめしかな

庭前は梅の葉のちる朝の雲

里人ら冬の日の山山大いなる

寒き日の蓑をつけしがなつかしく

うごいてゐる空いつたいの冬の雲

ここにも荒海のひびき葱畠

長野にて

霜の水づきこれのみちゆけばかしは原



二うね三うね雪菜と聞けば家のまへ

梅ももう咲く川向ひの夕の雲

空のくもりうつつに咲きし榛の木の花

梅をさす一つの甕ありこれの甕のたのしき

窓下の雪消え残り戸をあけてをる

白雪よ家のうしろにふりつもりたり

二三軒棟のさみしきや竹の秋

裏口の梨の花咲けよ野のくもり

雨ふりかけ空のあかるさ伊吹山

彼岸も果てし曇りつつ山の尾のいろ



海のうねりあたたかに日の暮れてくる

春の野を來し暮れかかり茶の木の垣も

山白雪の峰さへわかぬ空のいろ

一茶の墓に詣づ

木木がまばらな淡雪をふみわたり

追悼

門前雪しろのたまり吹く風

若きすゑものつくり

窓とちてゐるか地の雪の水づき

雨雲を洩る日のひかり人人よ隣り住めるよ

來しも五月の海の松島瑞巖寺

一日二日冷えて春の日の家のおもて

里治氏の墓に詣る

このみちをのぼる虎杖もすかんぼも嚙まず



木木の青い葉の吹き散るに出でてこどもら

わづかわが窓に見えて夏の夕空のいろ

月夜となりし田の中の家の構へ

萩にしぼしわれら身を沈めてあらむ

草にあそぶこどもたち秋の日のてり

秋の日暮るる垣のそとのひろびろ

日があたり稽田のならんでゐる

白露の野原のみちをゆきかかり

冬を迎ふる大根畑とわが家と

日のひかりこの谷の冬を待ちつつ



冷ゆる日夕飯の魚をたうべ

二つ三つ見え冬の日の藪中の石

ものものよ時雨ふるよるの家のうち

戸口冬の夜の月あかりにて

山のべの鳥はをりをりにさけび冬の雲

芝  
生

多摩川以後昭和七年迄の作



こさし、櫻の咲く頃を病んで二週間ばかり枕についた。その豫後、休養の心持で尙横臥の幾日かを重ねた。平常は、その日その時の事にも追はれて比較的慌しい暮らしをしてゐる自分も、この病間によつて、こころあだかも平らかになり、久しぶりに自分直三を凝視する様な心持にもなり得たのであつた。

これが、此際自分の第五句集を作りたいとおもふ動機もなつたやうである。句集上梓に據つて自省もし、より新たな、より慥かな土臺に踏立つて勉強し鋭氣躍進して行きたいと思ふ外はないのである。

一 碧樓第四句集『多摩川』發刊後、昭和三年春より昭和七年早春までの作より選抄して此一集をつくる。

昭和七年晩春 於駒澤寓居

一 碧 樓

夜ル 夜ルの妻とこどもと寒の内

起き出でて身に冬の日のひかり

三人ぐらしびつしり杉菜のしげる

山がかり夜道の明けし竹の秋

夜となる草の中にいてぬいたどり



水のおと松の花さき

草青々牛は去り

草に立つて聞ゆるは風ふくおと

水母が浮いては浮いては出舟出てゆく

草のなびきも一夏こもりぬの家の裏

牛は足が四本で野菊の花咲いた

叢芒根よりゆらぐに風にわがゆく

刈入畦草のみどりにて

秋の日の飯白し雲の白し  
旅

白河馬市の地を風吹いて



時雨るゝ魚の中にもえびは藻につく

空へたちのぼりわれらが焚火のけむり

うすいもみぢの近江の石山寺にのぼり

野に大雪も来よとおもふ冬菜を漬ける

ほのぼの家への枯草明けの春

寒き日の鴉黒くわれは男なり

河ありて河に沿ふ村々の寒の入

鳥のとぶ鳥のとびゆく空明るしよ

河土手の太きさびしさ人ら子らあそべ

われにかもぬれて花さき薊草



子を生し子を生して棲まふに赤いゆすらうめ

こゝら竹の葉のちりくるに朝の日影

お茶をのみ汗ばみて友とあるかな

お墓にまゐる直三單衣きしかな

このあたりの名残のほたるこの村人

川上へ一里半二里あるく杉菜のしげり

夏朝の庭にあそびて犬はかしこき顔

ねむの木の花さけ炊ぐ煙をあげよ

川のべよ暑きこの川の上はいづこべ

秋の風ふく鵝鳥けふは鳴かすに白し



地にて粟をひろひとりしかな

あはれ妻あるものられら草の花咲いた

太陽遠し秋の日の椽の木二三本

山うれし羊齒はうれしも葉をひろげをる

よき顔にて人はあるく大根畠

渚より漕ぎ出でて冬の海のうへ

冬の夜海にて船員船にをるかな

牛を追ひ冬の日在林に入り

ゆれながら鰈を釣る舟か沖のあかりつゝ

家のべよ人のつぶやき冬の草



雨ふるうすさむい日トキーはすんだ雨の空

女人女體 八つ手花 咲く

けふの日の鳥とび 秋の山の家

能登が突き出で 日のてりながら 秋の海

天地霜夜 わが机により

父にか似て わがこゑ 爐べの日暮れどき

日のひかりもの言はむにも 野の冬の雲

庭のべの霜の水づきて 鳥の顔

枯草 枯葎にしづかに 火をはなち

日々 冬木ばらばらに 隣人



寒明け土掘るにときどき口にとび來る土

芹は田に生ふる村人村の道

人のすがた野に出でて草を摘みつゝ

梅の實のげに小さき見えし梅の木

つばくらめとぶよき日よき顔の人々

尾ありて白いねこあるき夏の日の庭

夏の朝兒ぞ愛しきくるくるのまなこよ鼻よ

家べなか／＼菜種の畑ぼうとみのり

たそがれどきに著きし親しさ夏めくに

日かげ夏めくをんどりあるくわたくしあるく



山一つ山二つ三つ夏空

夏の日いろくの藻草水の中に

笈を山の水われに水来る

とつとう鳥とつとうなく青くて低いやま青くて高いやま

これ 頰 生 菩 提 百 日 紅

悼古原草

日のあかりあづまぎくといふか花さきし

秋の日わが家へ日かげりをあゆみ

行く手の松林はつきりしてさみしきこのやうな冬の日

冬の日何かやすらけきは枇杷の葉の大きく

冷ゆる日けふ空いつばいの御佛體



市街冬の日市街一角の空青く

山がかりにゆらぎもやまず雑木もみぢ

日のひかり澄み凡々乙女椿

くぬぎの木の枝おろす男ゐるうごきをる

松の木のすがた又の松の木のすがた冬の日ひかり

わがゆくいづかたも霜の水づくに出でて

霜朝更に不服である煉瓦塀何處までもつゞく

日のあかり葉のない葡萄の棚これを朝晩に

冬の日地の石々地に埋つてゐる石々

草密生す寂寞戸をあけてをる



冬の日河原の水が見えて幾らからくな風景

不満で連翹の花黄なる日々

草青くじつと住み堪へようものを

旅は麥の穂立ちやいろいろ青い草や

たのもしもこれは世の青き葡萄の房々

鬱憤單衣きて草を引いてをる

十薬の花が白いなどこのやうな生涯

夫人と夫人のいろくの調度との親しみのごときも夏の日

庭の萩の花さくをよすがに夫と妻と

木槿の花もをはりとなるらしいしつかり暮らさうぞ



朝に夕に老い人にも見せむ木槿花さきし

人間世界芙蓉の花に日のあたりをる

これは何といふこともなき冬の日土を盛りて

暑さもおとろへ浮いてゐる舟のかたちや

鳥は向ふへ向ふへ飛び草枯れてしまふ

小さな流れ川 困苦冬となり

霜この朝大きなたのひらをしてをる男

工場のひゞき或は鶏を飼へるなどの家冬の日

棕溪氏と同行雨中に久地の梅を見る

きぬかつぎはつめたくてよろしく寒くて梅の花

好日梅木々の花さき風のこゑ



杜

芝生以後昭和十年末までの作

40



球根十五六わたくし地に埋めてしまふ

いつとなく冬となり木木とわれら

多摩川の舟を見に行かうかるい首巻をする

冬の日の海あすこに黒い洲があらはれる

鷗平さんを訪ふ

渡舟がわたしてくれるありがたさ冬の日水のあかり

りつばな馬の蠶春の日けふいちにちが暮れる

沈丁花さくみんな地におりてあるかう

石垣しつかりしてゐるが何やらさみしい草が青い

不漁で夏が来る舟のへさきの方あかり

桐の花さき明日の太陽をおもふ夕ぐれの空



水を鯉走りこの川筋の家家の人ら

房州白濱にて

炎天巖かげに跼むいづこよりか逃れ來しごとし

人人みな去り日影去りおほばこの花

葡萄を食ふ明るき窓を持つそれほどのしあはせに男

池がありきのふけふ祭の芒原

橋をよろこんで渡つてしまふ秋の日

橙一つをもとめうす暗い家のうちへもどつた

老母病むさきく

遠くに私ゐる地の霜の白きに

凍土より日出で雲を

雪白い雪を掃きおくれた家のまへ



家のべ日日枯草は匂ひもない

芹薺けふ暮るる北の根雲が去なす

杉菜をふんでゐるひとり残りしがごとく

ひとり黒髪の少女春の日ひなたへ歩み

繪榮氏をむかへ

對座沈丁の花のさかりくらき夜

石榴芽が立ち隣りとは垣をしてある

ひとつふたつ春蟬鳴いてゐる方へ松陰神社へまゐる

子らよ日なたで太鼓たたいてうたふ甘茶のうた

花火あそぶに暗き中にておもふふるさとの稽の花火

海のこゑ舟の帆白く海はくらく



桃の葉の茂り人はこちらにみな坐りて話す

桐の花おつ土を掘りやめない三人四人の男

鶏百羽一圍ひに飼はれをり夏めいた日ざし

親爺の茄子苗瓜の苗ところどころ地に水たまりありて

ふるさと備中をおもふに麥秋の杜の端のいろ

あぢさゐのあをいつほみ日かげりし夫人

あるがまゝ合歡茂りのおとろへを見せし一本

かたい柿を食ひいちにち武藏の草原にあそび

魚は鱗ふる水の中に生き秋の日

栗がすんだ栗の林へつづき一すぢみち



みどりの小草地に離々ミしてマダム秋の日

すこし錆びてをる鉄できりとつた野菊の花

さざんくわ花さく井戸の水をのみ

ラグビー観戦

空ひろびろし若くてフルバックのかまへ

冬日が来るその屋根をぬつてくれ赤いいろでも黒でも

河からの雨空であり家の八ツ手花さく

櫛の木四五本立ち虚空秋の日

けふあす何事もないやうに白く咲いた茶の花

うすいあかりに置かれ小蕪白菜と小供の帽子

蕎麥を刈るけふおほ空のお日さまの行方



蝶平べたくみな生きてゐる水に放つよ

機関車とそれはすつかり別ものの草にゐるかまきり

しぜん夜が更けたお茶をいただくすこし筒の茶わん

ごろ坊来る

垣越えて来しよ枯草をしばらく歩いたでもあらう

ちさき羽箒のこれをつかふ冬の夜かるきを手に

日毎日毎菜島うきしづみするやう冬日がてり

婚 賀

むさしさがみ梅がもう咲く野のひかり

在るものわれらが電車ばかりのごとしゆふべ灯りて走り

川べからばらばらこの方へ冬木の雑木

薄い氷してゐ彼の女はまるつこいその肢體



森かげであり冬木じつと立つて枝枝あり

冬の日靄立ち埠頭近く混沌人人うごき

寒明けそくばくの舟も浮びてある海の水

薺摘まうと蒲團より起き出でしこの朝

不相識草萌ゆるところ行き來の人ら町の端

春日くもりしたしきは家のかたち屋根がありて

廢艦であり海苔しびであり空一方のあかり

風 囂々 一木 椿 の つ ぼ み

どつちへも流れぬどぶなんで辛夷花さいた

食ばんあるまゝにたべるアネモネの花あるまゝに



潮寄する春の夜疊にすわり

飲む水あり空に太陽ありて春の日

こども小笠をよろこび部屋のうちに音もなき春の日

葉の出た桃の木に立つてわたし両手空しい

ふるさとへ麥の穂が立つ道を

こゑなき人らがをり若い葉の出てるさるすべり

海面へつづくみちゆふべ汗ばみてゆくに

一つの斜面杉菜が長け空の下である

夏めく一つの机があり少女きつちりすわり

苺のみより太陽を見ないそらいちにち



黒い扇子であり三十は越えてもぬよう女のひと

大きな空虚がありあをぎりの葉のしげり

自分がはつきりとして蓼の葉を十枚もぐに

夏の日とところどころ木があつて家に歸るほかないでせう

桃の實をもぐをとこ木に日照るへ出でて

子鱧いつびきを釣りあげひろい海のさざなみ

あぢさゐ花のおとろへし前にしをとこ

家に茄子を食ひ生きて髪はえてをとこ

或日のくもり夫人に安易なる二三本樹のしげり

夏の夜灯り若者は魚のごとくにひとりひとり



街に出て街が涼しい日どこにも電柱しつかりと立ち

いちにちいちにち瓜を茄子をたうべ

炎天陸軍タンク百うごき草地凹凹

第三の男妻帯秋の日屋根より出づる太陽

梨一箱を部屋に置いてゐるふとんにねむる

ほほゑみてありわれらが鶴平さん立つて麥わら帽であり

雨がふりやまない雨ふる鶴の繩のさばき

旅

草に曼珠沙華咲き夜夜枕にねむり

露朝家の窓より杜はよろこばし見えて

草の中に芒をとるこどもうごいて



石榴がわれるありものもの濃きかげあり

遠くから来た犬 白い犬がゐて冬の夜の家

句座

冬の夜ひとりひとりの顔にて顔がほかのものよりも白いはう

黄菊咲き過ぎた驛員の人も立つて見てゐる

刈田の水ひたひたに家に母すこやかに

西郊冬が来る日てりて住めり

一碧樓一千句終



21280

昭和十一年十一月二十日印刷  
昭和十一年十一月二十五日發行 定價 二圓

東京市世田谷區若林町三七三

著作兼 發行者 中塚直三

東京市品川區大井權現町三七五七

印刷者 谷新一

同所

印刷所 三平印刷所

東京市世田谷區若林町三七三

發行所 海紅社

振替東京三〇一一〇番



S. 57.8.12 後

海紅第六句集

定價 一圓五十錢

綠野 (海紅第七句集)

定價 一圓五十錢

月刊 海紅 一冊五十錢

海紅第一、第二、第三、第四、第五句集。我等の句境。(絶本)

東京 海紅社 振替 東京 〇一〇三



